

保護者の理解 信頼 協力 を生み出すため

# 学校にできる3つのアクションとは？

## 保護者の孤立化で 高まる学校への期待

「保護者対応は苦手だ」「保護者から厳しい意見を言われそうで怖い」という先生は少なくないだろう。それは図Aのように、学校と保護者の間に不信や警戒がある状態かもしれない。なぜそうなるってしまうのか。まずは本特集の内容を振り返って、保護者の状況を改めて確認しておきたい。

特集前半の調査報告によると、生徒が進路の影響を受ける人にあげたトップ2は「母親」「父親」(P12図4)。保護者は生徒の進路選択において最も重要な存在といえる。また、「子どもに合う分野をアドバイスする」「どんな学部、学科、コースがあるかを調べる」など、進路選択行動面においても保護者の存在感は増す方向にある(P17図16)。全国高等学校長協会会長と全国高等学校PTA連合会会長の対談では、子どもに関わりたい保護者の増加が話題になった(P26)。

一方で、子どもの進路に関わることへの不安感もつかえる。「子どもの進路選択にアドバイスすることが難しい」と

いう保護者は7割超。その理由は「最新の進路情報を知らないから」「社会の予測がつかないから」など(P22図22・23)。対談で語られたように、影響の大きさを感ずる子どもとの関わりに慎重になる保護者も少なくないだろう。

対談では保護者の孤独感も指摘された。高校は通学範囲が広く、中学校までのような保護者の人間関係ができてくれない中、学校への依存はおのずと大きくなる。多くの保護者が、進路指導に対して「もっと進路に関する情報提供してほしい」「もっと進学や就職に関して具体的に指導してほしい」などと要望している(P25図26)。

しかし、保護者は子どもの進路に関するすべてを学校に委ねているわけではないことも、調査で明らかになった。「学力」や「人間関係」については学校への期待が大きいが、「働く意義について教える」「将来の目標を持たせる」は家庭の役割と考える保護者が半数超。「進路選択の相談にのる」「長所や個性を見つけて伸ばす」などは、家庭と学校両方の役割との認識が目立つ(P24図25)。子どもへの関心が高く、進路選択における保護者の役割は少なくないと認

## ACTION 1 伝える



### ブログやSNSも活用し 学校理解を促進

保護者の学校理解促進のため、多くの高校は年度始めに保護者会やPTA総会を開催し、学校全体の経営方針から進路指導や生活指導などについて説明しているだろう(倉・三・桐)。幅広く理解してもらうには、保護者の出席率がカギとなる。土曜日開催など、仕事をもち保護者にも配慮した日時に開催しているか。保護者ニーズの高いクラス懇談を組み込むなど、魅力的なプログラムになっているか。開催の通知の配布だけでなくHPでも広報するなど、確実に保護者に知らせる工夫をしているか。来年度に向けて今一度点検しておきたい。

また、年度始めの一回だけでなく、その後も学校のメッセージを発信し続けることが大切だ。何度も保護者会を開けない場合は、ブログやFacebookを活用する手も(倉・

三・桐)。プリント配布に比べて時間もコストも抑えられる。学校行事や日常の教育活動の様子をこまめに報告をすることで、保護者は学校の姿勢や取り組みの意義を感じてもらえるだろう。閲覧数を増やすには、写真と簡潔な文章で読みやすくするのがポイントだ。

### インターネット時代こそ 学校からの進路情報が大事

大学入試改革が進む近年、その動向やわが子への影響を気にする保護者は多い。インターネットに有象無象の情報があふれているからこそ、学校のもつ信頼性の高い情報への期待は大きい。保護者対象進路ガイダンスや進路ニュースは、その時期や頻度、内容は、自校の保護者の不安に応えられるものになっているだろう。

進学に関する情報のうち、「現在の入試制度の仕組み」や「進学費用」などは、多くの保護者が重要だと認識している(P23図24)。これらは特に手厚く情報提供したい。また、ブログやFacebookを活用し、進路トピックスをタイムリーに発信する方法もある(三)。



保護者と共にキャリア教育を行うために学校は何をしたらよいか、調査結果や実践事例からみえてきたポイントを整理してみました。

図 B

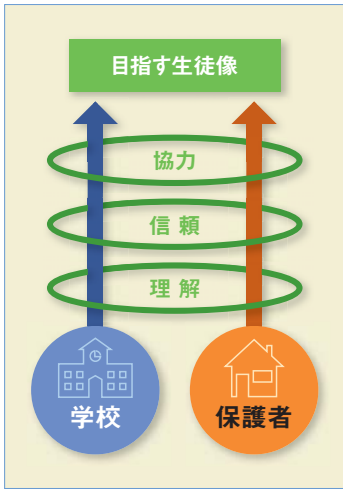
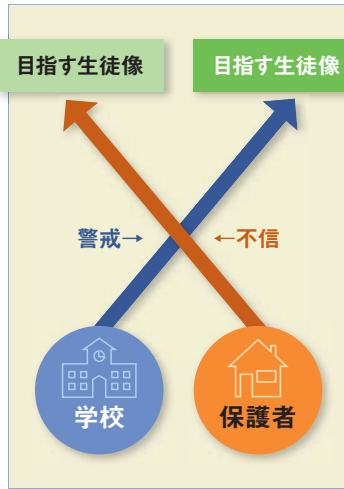


図 A



**保護者に働きかけたい  
伝える・つなぐ・協働する**

識しているが、進路環境の動向や社会の行方が見え、何をしたらよいかかわらない。情報交換したり、悩みを共有したりする相手も少ない。だから学校に頼るしかない——そんな保護者に、学校は寄り添うことができているだろうか。

一方、本特集で事例紹介した3校の保護者からは、そうした保護者像とは少し異なる印象を受ける。伝わってくるのは、学校の教育方針への「理解」、学校や教師への「信頼」、そして学校教育に踏み込んで自分たちができることを

しようという「協力」の姿勢だ。それが支えになり、図Bのように、学校と保護者が同じ方向を目指して連携する様子がかがえる。背景には学校のどんな働きかけがあるのだろうか。

まず事例校に共通する最大の特徴に、学校情報と進路情報の発信に力を入れていることがあげられる。必要な情報を十分に「伝える」ことで、わからないことによる不安や疑心暗鬼を取り除く効果をあげている。

また、保護者が学校に集まる機会が充実している点も、3校に共通する。倉吉東高校はPTA参加の行事ごとに懇親会を開催。三輪田学園中学・高校は校長講演と保護者交流を組み合わせた集いを年5回行う。桐光学園中学・高校では年4回、定期考査の結果を保護者に手渡しする機会を通じてコミュニケーションを図っている。学校が教員と保護者、保護者同士の人間関係を「つなぐ」ことで、子育ての閉そく感や情報不足の不安を軽減させている。

そうした取り組みによって関係性ができる、キャリア教育や学校行事における保護者との「協働」も可能だ。倉吉東高校や三輪田学園中学・高校では、保護者が生徒に対して職業講演を実施。「○○さんのお母さん」など、身近な存在の話は生徒に響くという。キャリア教育が本格的に動き始めて10余年が経ち、その枠は着実に広がってきた。次は、「保護者と協働するキャリア教育」へ歩みを進めたい。

**ACTION 2  
つなぐ**



**学校と保護者、保護者同士が本音で話す場づくりを**

学校と保護者、あるいは保護者同士が人間関係を築くには、一方の情報提供やインターネット・電話を介した交流だけでなく、**対面のコミュニケーション**が重要だ。保護者が気軽に学校を訪問できる機会をつくりたい。

まずは、体育祭や文化祭など既存の学校行事に足を運んでもらう

工夫から始めてみてはどうか。**積極的に告知を行い、保護者が参加できる場面を用意するなど、歓迎していることのアピールを**(倉・三)。

また、保護者の交流を目的としたイベントの開催も効果が高い。クラス・学年単位の集まりは、同じ時期の子どもの情報や悩みを共有できる。また、学年の枠を超えた集まりは、先輩保護者から今後の様子を聞けたり、アドバイスをもらえる点が好評だ(三)。

こうした交流の場では、子どもの氏名や学年、クラスがわかる名札を用意し、教員も名札を着用するなど、ちょっとした工夫でコミュニケーションが活性化するという(倉)。

**ACTION 3  
協働する**



**保護者の社会経験に学ぶ機会をつくらう**

保護者の仕事について会話しているという生徒は4割で、「なぜ働かなくてはいけないのか」を話し合った経験がある生徒は2割に満たない(P10図1)。自分の保護者の社会経験すらよく知らない生徒が少なくない実態から、職業観の醸成を目的とした職業調べのプログラムの一環として**保護者へのインタビューを**

行くと、新たな発見や刺激があるのではないだろうか(三)。

また、職業人講話の講師を保護者に依頼し、仕事のやりがいや働く意義を語ってもらう方法もある(倉・三)。人選が重要だが、日常からプロフィールや考え方がみえるような本音のコミュニケーションができていればスムーズにいきそう。講話の時間は20〜30分程度なら、保護者の負担感も小さいと思われる。

「伝える」「つなぐ」の努力をしなから徐々に学校の活動に参加してもらおう【協働】を進め、「チーム学校」のネットワークを強化していくことを目指したい。